

読書科演習資料

Library Skills Workbook

1年 組 番
2年 組 番
3年 組 番

氏名：



関西学院中学部

KWANSEI GAKUIN JUNIOR HIGH SCHOOL

この「読書科演習資料」は、関西学院中学部司書教諭であった川北信彦先生、および関西学院中学部教諭である重松一朗先生が中心となって編集・執筆された『新編読書科演習資料』（関西学院中学部、2000）を土台に、以下の資料を主な参考資料としました。

- ・ 梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波新書、1969）
- ・ 木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書、1981）
- ・ 小林宏『読書する中学生—関西学院における一つの試み』（関西学院中学部、1985）
- ・ 木下是雄『レポートの組み立て方』（ちくま文庫、1994）
- ・ アドラー、M.J.・ドーレン、C.V.、外山滋比古・榎未知子（訳）『本を読む本』（講談社学術文庫、1997）
- ・ 宅間紘一『新版はじめての論文作成術—問うことは生きること』（日中出版、2003）
- ・ 泉忠司『泉式文科系必修論文作成術』（夏目書房、2003）
- ・ 毎日ムック・アミューズ（編）『おもしろ図書館であそぶ—専門図書館 142 館完全ガイドブック』（毎日新聞社、2003）
- ・ 日本図書館協会図書館の自由委員会（編）『「図書館の自由に関する宣言 1979 年改訂」解説』（日本図書館協会、2004）
- ・ 塩見昇（編著）、川崎良孝（編著）『知る自由の保障と図書館』（京都大学図書館情報学研究会、2006）
- ・ 野矢茂樹『新版論理トレーニング』（産業図書、2006）
- ・ キム・ジョンキュー『知的な大人の勉強法—英語を制する「ライティング」』（講談社現代新書、2006）
- ・ 田中孝一（監修）ほか『中学校・高等学校 PISA 型「読解力」—考え方と実践』（明治書院、2007）
- ・ L. カッソン、新海邦治（訳）『図書館の誕生—古代オリエントからローマへ』（刀水書房、2007）
- ・ 創元社編集部（編）『関西図書館あんなに BOOKMAP—大阪 兵庫 京都 奈良 滋賀 和歌山 専門 大学 公共』（創元社、2007）
- ・ Kelly Kennedy-Isern、竹内理（編）、西香生里（編）、藪越知子（編）『基礎からわかるパラグラフ・ライティング』（松柏社、2007）
- ・ 塩見昇（編著）『図書館概論』（日本図書館協会、2008）
- ・ 中村百合子『占領下日本の学校図書館改革—アメリカの学校図書館の受容』（慶應義塾大学出版会、2009）
- ・ 桑田てるみ（編著）、学校図書館とことばの教育研究会『思考力の鍛え方—学校図書館とつくる新しい「ことば」の授業』（静岡学術出版、2010）
- ・ 庭井史絵（編著）、チームちりぶろ『地理で学ぶ 6 ステップ探究学習—学校図書館を活用したカンタン世界の国調べ』（2010）
- ・ アメリカ・スクール・ライブラリアン協会（AASL）（編）『21 世紀を生きる学習者のための活動基準』（全国学校図書館協議会、2010）
- ・ アメリカ・スクール・ライブラリアン協会（AASL）（編）『学校図書館メディアプログラムのためのガイドライン』（全国学校図書館協議会、2010）
- ・ 日本図書館協会図書館利用教育委員会、図書館利用教育ハンドブック学校図書館（高等学校）版作業部会（編著）『問いをつくるスパイラル—考えることから探究学習をはじめよう！』（日本図書館協会、2011）
- ・ 小野田博一『13 歳からの論理的な文章のトレーニング』（PHP 研究所、2012）
- ・ 倉島保美『論理が伝わる「書く技術」』（講談社ブルーバックス、2012）
- ・ 戸田山和久『新版 論文の教室—レポートから卒論まで』（NHK 出版、2012）
- ・ 全国学校図書館協議会『6 プロセスで学ぶ—中学生・高校生のための探究学習スキルワーク』（全国学校図書館協議会、2012）
- ・ 桑田てるみ（監修）『鍛えよう！ 読むチカラ—学校図書館を育てる 25 の方法』（明治書院、2012）
- ・ 成田康子『みんなで作ろう学校図書館』（岩波ジュニア新書、2012）
- ・ Kuhlthau, C.C., Maniotes, L.K., Caspari, A.K. (2012). Guided inquiry design. Libraries Unlimited.
- ・ 大迫弘和『国際バカロレア入門—融合による教育イノベーション』（学芸みらい社、2013）
- ・ 山口裕之『コピペと言われないレポートの書き方教室—3 つのステップ』（新曜社、2013）
- ・ 後藤芳文、伊藤史織ほか『学びの技—14 歳からの探究・論文・プレゼンテーション』（玉川大学出版部、2014）
- ・ 倉島保美『論理が伝わる世界標準の「プレゼン術」』（講談社ブルーバックス、2014）
- ・ 山元隆春（編著）『読書教育を学ぶ人のために』（世界思想社、2015）
- ・ 桑田てるみほか『学生のレポート・論文作成トレーニング 改訂版』（実教出版、2015）
- ・ Callison, D. (2015). The Evolution of inquiry: controlled, guided, modeled, and free. Library Limited.
- ・ 今井福司『日本占領期の学校図書館—アメリカ学校図書館導入の歴史』（勉誠出版、2016）
- ・ 猪原敬介『読書と言語能力—言葉の「用法」がもたらす学習効果』（京都大学学術出版会、2016）
- ・ 塩谷京子（編著）『すぐ実践できる情報スキル 50—学校図書館を活用して育む基礎力』（ミネルヴァ書房、2016）
- ・ 桑田てるみ『思考を深める探究学習—アクティブ・ラーニングの視点で活用する学校図書館』（全国学校図書館協議会、2016）
- ・ 片岡則夫（編著）『「なんでも学べる学校図書館」をつくる—ブックカタログ&データ集』1・2（少年写真新聞社、2013・2017）
- ・ 根本彰『情報リテラシーのための図書館—日本の教育制度と図書館の改革』（みすず書房、2017）
- ・ 逸村裕、田窪直規ほか（編著）『図書館情報学を学ぶ人のために』（世界思想社、2017）
- ・ 読書猿『アイデア大全』（フォレスト出版、2017）
- ・ 読書猿『問題解決大全』（フォレスト出版、2017）
- ・ 柳与志夫、田村俊作（編）『公共図書館の冒険』（みすず書房、2018）
- ・ 仲島ひとみ、野矢茂樹（監修）『それゆけ！ 論理さん—大人のための学習マンガ』（筑摩書房、2018）
- ・ ナンシー・アトウェル、小坂敦子（訳）、澤田英輔（訳）、吉田新一郎（訳）『イン・ザ・ミドル—ナンシー・アトウェルの教室』（三省堂、2018）
- ・ 小針誠『アクティブラーニング—学校教育の理想と現実』（講談社現代新書、2018）
- ・ ジョン・ハッティ、山森光陽（訳）『教育の効果—メタ分析による学力に影響を与える要因の効果の可視化』（図書文化社、2018）
- ・ 全国学校図書館協議会（制定）『情報資源を活用する学びの指導体系表』（2019 年 1 月 1 日制定）
- ・ 竹内愨『生きるための図書館—一人ひとりのために生きるための図書館』（岩波新書、2019）
- ・ 小笠原喜康、片岡則夫『中学生からの論文入門』（講談社現代新書、2019）
- ・ 日本読書学会（編）『読書教育の未来』（ひつじ書房、2019）
- ・ 根本彰『学校改革のための学校図書館』（東京大学出版会、2019）
- ・ 山本順一（編）、三浦太郎（編）『図書・図書館史—図書館発展の来し方から見てくるもの』（ミネルヴァ書房、2019）
- ・ 新藤透『図書館の日本史』（勉誠出版、2019）
- ・ 文部科学省「学習指導要領『生きる力』」（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm）2020 年 3 月 20 日確認

上に挙げた資料以外に、学校図書館、総合的な学習の時間、探究型学習、情報教育、読書教育、作文教育、アクティブラーニングに関する学会、研究会などでお世話になっている関係者、関西学院中学部・高等部・大学の教職員、とくに関西学院中学部の読書科をご担当いただいた黒原理恵先生、河野真也先生、青木友平先生、嶺坂なおみ先生、木本貴士先生、塩田千紗先生より、貴重なご意見をいただき、参考といたしました。この場を借りてお礼申し上げます。

関西学院中学部図書館ウェブサイト (<https://library.kgjh.jp/>)

はじめに 関西学院における図書館と「読書科」の歴史



関西学院における読書と図書館の歴史は古い。ときは、創立者初代関西学院院長 W.R. ランバス先生にさかのぼる。ランバス先生が「米国南メソジスト監督教会日本宣教部総理」として 1886 (明治 19) 年 11 月 24 日に神戸に着任した 2 日目、まず着手した伝道のわざは、自宅を開放して「読書館」(Reading Room) を開設したことであった。関西学院が創立される約 3 年前のことである。キリスト教への信仰というものをただ感性に訴えるようなアプローチをとらず、知的な理解力に訴え、しかも読書を信仰への道筋として考えていったことは興味深い。

関西学院は 1889 (明治 22) 年 10 月、W.R. ランバス先生によって、兵庫県菟原郡原田村 (現在の神戸市灘区王子町) に設立され、神学部と普通学部とをもって開校した。最初の校舎は木造 2 階建 2 棟であった。9 月 28 日付で県より認可を受けた学校設立願書により添付された図面を見ると、この校舎の 1 階に 30 畳の書籍室という 1 室があり、集会室・講堂を兼ねていた。この書籍室は「しよじゃくかん」と呼ばれていて、単独の図書館とは言えないが、関西学院における図書館の出発点と考えられる。



▲ 神戸の原田村にあった関西学院全景。中央が書籍室のあった建物。(1889年)



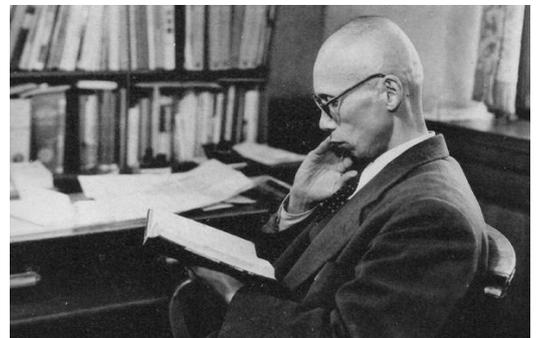
▲ 最近まで図書館として用いられていた関西学院の時計台

1929 (昭和 4) 年、関西学院が神戸の原田村から西宮上ヶ原キャンパスに移転したとき、時計台として図書館は建設された。建築家としても著名な W.M. ヴォーリズがキャンパスの全体設計をする際に、基点となる建物として配置。正門前の学園花通りから正門、中央芝生、時計台、甲山山頂を結ぶ軸線は、スパニッシュ・ミッション・スタイルで統一された建築群、緑豊かな環境とともにキャンパスの特長となっている。

関西学院が図書館を大切にしてきたさまは、戦後日本が民主主義を確立するため、学問の自由とそれにもとづく教育の自由を希求し、その身近な存在である学校図書館に遅々としながらも力を注いだ過程に通じる。

1947 (昭和 22) 年 4 月、新制中学部は旧高等部校舎 (現在中学部グラウンドがある場所に存在した) に同居する形態でスタートした。初代中学部部長矢内正一先生は、読書と図書館の重要性を認識し、まず教職員

室に生徒用の本を並べ、生徒の「読書室」としても開放していた。その後、読書への需要が高まるにつれて、それぞれのクラスにおいても学級文庫も設けられた。1951 (昭和 26) 年 4 月、中学部が現校舎本館に独立移転したとき、1 教室分の中学部専用の図書館 (以下中学部図書館) が設置された。矢内先生自身が担当された、1 年生週 1 回の授業である「生活指導科」において、読書やこの図書館についての指導がおこなわれた。1959 (昭和 34) 年 9 月、中学部図書館は 2 教室分に拡張改修された。



▲ 新制中学部初代部長矢内正一先生

1962 (昭和 37) 年 3 学期、「生活指導科」の授業は、矢内先生から中学部図書館を担当されていた川北信彦先生に委ねられ、川北先生による授業は 1963 (昭和 38) 年より 2・3 学期に拡大された。1964 年 4 月、川北先生は学校図書館法の定める司書教諭に就任し、1965 (昭和 40) 年 4 月より 1 年間通しての授業をおこなった。1967 (昭和 42) 年 4 月、第 3 代部長小林宏先生は、「生活指導科」を読書や図書館の指導に特化していた内実に合わせて「読書指導科」と改められ、以来略して「読書科」と呼ばれるようになる。



▲ 中学部図書館(1969年)

1976 (昭和 51) 年、精神鍛錬のための読書を重んじる第 11 代関西学院院長久山康先生の方針により、中学部教育の柱の一つとして「読書」が数えられるようになった。中学部の「読書科」を 1 年生週 1 回の授業から 3 年間週 1 回の授業に、そして高等部においても「読書科」を新設することが決まり、「読書生活の形成と深化」と「自主的自立的活動の体得」をその目的とした。1978 (昭和 53) 年 4 月より、中学部では、1 年



▲ 川北信彦先生

生・2 年生週 1 回の授業を川北先生が、3 年生週 1 回の授業を小林先生が担当され、3 年間通しての読書科の授業がおこなわれるようになった。のちに小林先生は、この授業における実践を『読書する中学生—関西学院における一つの試み』に著している。

1987 (昭和 62) 年 4 月より、1 年生・3 年生週 1 回の授業を川北先生が、2 年生週 1 回の授業を重松一郎先生が担当されるようになり、より体系的に展開されるようになった。それに応じるように、中学部図書館も、1989 (平成元) 年 9 月に普通教室 3 教室分、1997 (平成 9) 年 8 月には 4 教室分に拡張改修された。

近年の「読書科」の範疇における進展は目覚ましい。1989 (平成元) 年 4 月より高度情報化社会に対応すべく技術・家庭科において「情報」の項が、2002 (平成 14) 年 4 月より自ら学び自ら考える力や学び方・考え方を身に付けさせて問題を解決する資質や能力を育むべく「総合的な学習の時間」が、2003 年 4 月より 12 学級以上の学校に学校図書館運営の中心的役割を担う司書教諭が設けられた。代表的な文部科学省 (文部省) の施策だけでも以上のようなことから、実社会での進展は推して量ることができる。



▲ 中学部図書館(2012年)

それらを受けて中学部図書館と「読書科」は新たな歩みに入る。2012 (平成 24) 年 4 月、中学部は男子校から共学校になり、生徒数も増えた。これを契機として、ハード面、ソフト面両面の見直しがおこなわれた。教職員はもちろん、生徒や保護者の理解により、新校舎入口すぐに新しい中学部図書館が完成した。中庭に面し、明るく、同時に 3 学級が授業可能で、ネットワーク環境も整っている。「読書科」は各学年週 1 回の授業から、1 年生週 1 回、2・3 年生週 2 回の授業へと変わった。変化の激しいこれからの社会で「生きる力」をつける環境は整った。

2021 年度 (令和 3 年度) より、中学校では新しい学習指導要領での実施となる。従来の「知識・技能」に「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力、人間性等」を加えた、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実」が求められている。また「主体的・対話的で深い学び (アクティブ・ラーニング)」の視点から「学習過程の改善」も求められている。これらはすでに「読書科」において取り組んできた学びではある。しかし、日進月歩の ICT 機器の活用や実社会に即応する考え方やスキルの定着など、「読書科」は進化し続けなければならないと考えている。

読書科の目標は「自立した探究者の育成」である。具体的には「読書生活の形成と深化」と「自主的自立的活動の体得」と「高度情報化社会に対応する情報活用能力の育成」を目標としている。これから「読書科」や図書館で学び得ていく方法や技術は、他の教科だけでなく、高等学校、大学、実社会においても生きる、汎用性あるものと堅く信じている。また方法や技術だけでなく、その過程から豊かな人生を送るための普遍的な価値を見出してほしい。

II. 3年間の読書科の授業



A. 読書科の目標

「自立した探究者の育成」

1. 「読書生活の形成と深化」 「読書」＝書を読む
 - a. 本を読む生活習慣をつける
 - b. 心を豊かにする、精神をたがやす
 - c. 表現するための知識や教養を得る
 - d. 文明的な表現である文章を活用する力をつける
2. 「自主的自立的活動の体得」 「読書」＝読み書き
 - a. 調べる方法や技術を身につける
 - b. 社会のさまざまな問題に対応し、新たな社会をつくる
 - c. 自分で問題を見つけ、解決し、伝え、さらなる問題を見つける
3. 「高度情報化社会に対応する情報活用能力の育成」 「読書」＝情報
 - a. 情報活用の原理原則を理解する体得する
 - b. 知識・情報に関する社会的な義務と権利（知的財産権）を知る
 - c. メディアをつかひこなす基本的な力（メディア・リテラシー）をつける

B. 読書の目標

1. 1年生
 - ・ 本を読む習慣をつける
 - ・ 物語を読める
2. 2年生
 - ・ 新書が読める
3. 3年生
 - ・ 古典が読める

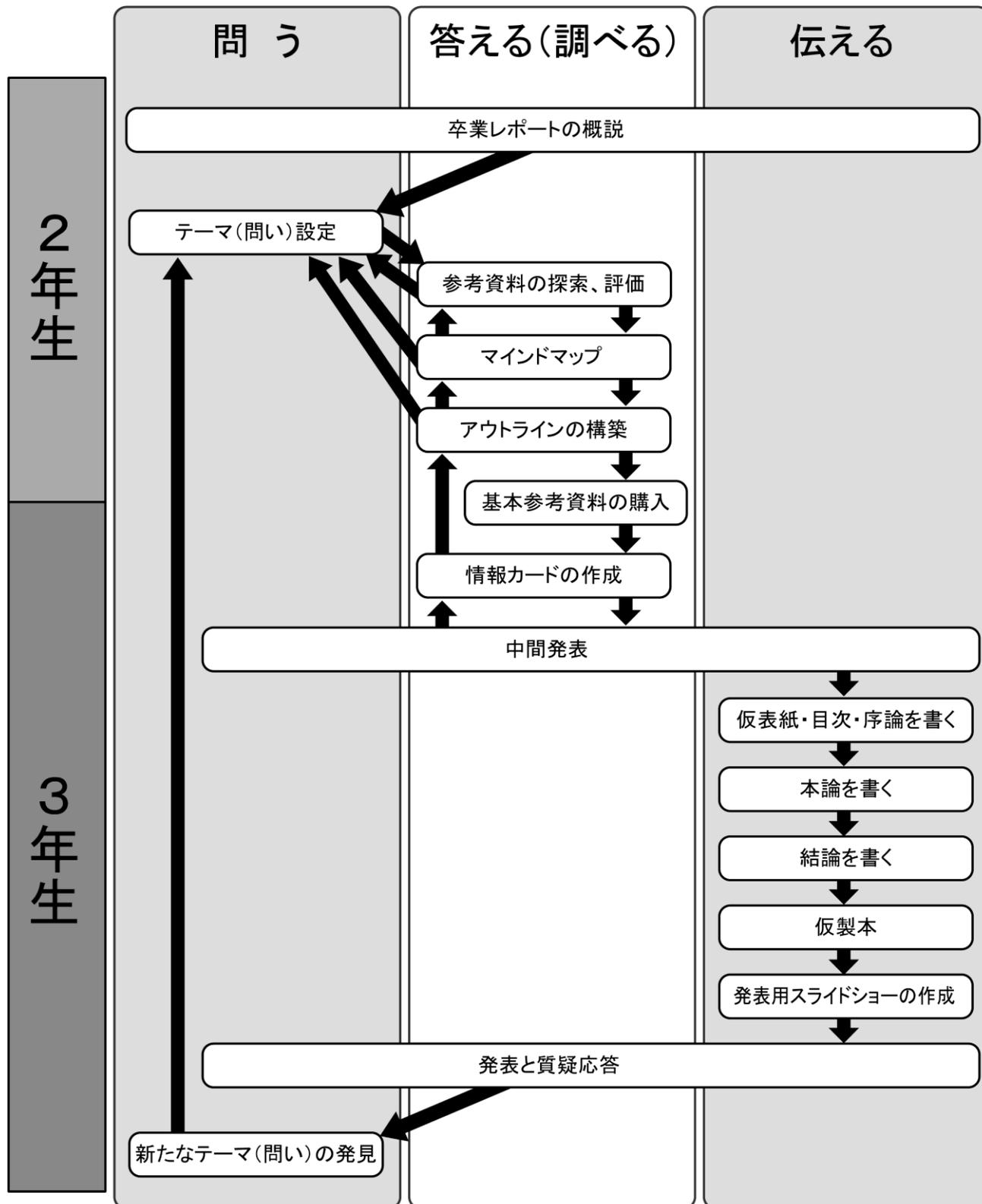
C. 学年ごとの読書科の授業

1. 1年生
 - ・ 図書館と本の理解
2. 2年生
 - ・ 情報の獲得、整理、活用
3. 3年生
 - ・ 学校図書館、各教科学習、修学旅行（体験）を核とした総合的な探究型学習

D. 3 年間の読書科の授業

		図書館・本への理解	課題の設定	メディアの利用	情報の活用	まとめと情報発信	
1 年生	1 学期	学校図書館利用指導 ①					
					読書科オリエンテーション ①		
						基本的なレポートの書きかた ①	
		図書館の自由 ①					
		図書館の歴史 ①					
	夏休み	図書館の種別 ②					
		図書館の分類と排列 ⑤					
	2 学期	公共図書館の見学とレポートの作成					
		専門図書館の見学とレポートの作成					
	冬休み	大学図書館の見学 ①					
図書館の目録 ①							
3 学期	グループによる校外学習ポスターの作成 ⑤						
	本と図書館と現代社会 ②						
	博物館・文書館の見学とレポートの作成						
						作文の技術 ④	
2 年生	1 学期	知的財産権と新しい人権 ②					
					情報カードによる演習 ②		
					マインドマップによる演習 ④		
					ブレインストーミングによる演習 ③		
	夏休み	参考図書（百科事典）、オンラインデータベース、ウェブを活用した総合演習 ⑦					
		新聞の特徴 ①					
	2 学期	事実と意見の違い ①					
		新聞記事の切り抜きと資料化					
	3 学期	作文の技術 ④					
ペアによる校外学習新聞 情報カードの作成 ⑦							
ペアによる校外学習新聞 新聞の作成と発表 ⑦							
	卒業レポート テーマ設定						
3 年生	1 学期	卒業レポート 参考資料の探索と評価 ⑧					
		卒業レポート 仮説の設定 ②					
	夏休み	卒業レポート アウトラインの構築 ②					
		卒業レポート 基本となる参考資料の購入					
2 学期	卒業レポート 作文の技術 ④						
	卒業レポート 情報カードの作成 ⑫						
	卒業レポート 中間発表 ③						
冬休み	卒業レポート 情報カードの作成（補完）						
	卒業レポート 目次・序論を書く						
3 学期	卒業レポート 本論を書く ⑭						
	卒業レポート 結論を書く ③						
	卒業レポート 発表用資料の作成 ③						
	卒業レポート 製本						
	卒業レポート 発表と質疑応答（新たな問いの発見） ⑥						
	3年間の読書をふりかえる ①						

E. レポート作成にかかるプロセス



III. 「推薦図書リスト」と「10分間読書」



A. 目的

1. 本を読む習慣をつけるため
2. 文字や言葉や文章に慣れ親しむため
3. 基本的な書誌情報の書き方を知るため
4. B6 カードに慣れるため

B. 「推薦図書リスト」

1. 中学部が推薦する 200 冊+α の本のリストである。
2. 『関西学院中学部図書館 利用案内』パンフレットの巻末に掲載されている。
3. このリストに載っている本はもちろん、リスト以外の本もどんどん読んでいく。
 - ・ 「10分間読書」の時間を活用。
 - ・ 通学での電車内、学校での休み時間、自宅での自由な時間など、時間を見つけて。
4. 本を読んだ記録を「読書カード」に書く。
5. 各学期のはじめに「読書カード」を提出する。
6. 返却された「読書カード」はしっかり保管しておくこと。(再チェックする場合あり)

C. 「10分間読書」

1. 実施時間は、読書科の授業および国語科の授業のはじめ 10 分間。
2. 全員、授業開始前に本（マンガ・雑誌以外）を 1 冊用意しておく。
 - ・ 「推薦図書リスト」を参考にする。
 - ・ 事前に中学部図書館から借りるか、自宅から持ってくる。
3. 全員、授業開始のチャイムが鳴り次第、静かに本を読み始める（10 分間）。
4. 先生の合図で終了。挨拶、出欠、忘れ物のチェックを行って、授業に入る。
5. 時間を見つけて、本を読んだ記録を「読書カード」に書く。

D. 記録（書誌情報）のとりかた

1. 本の記録は、書誌情報がすべて記されている奥付を見る。書誌情報の基本事項は次の通り。
 - a. 著者名
 - ・ 個人ではなく団体名の場合もある
 - ・ 3人以上いる場合は、2人分記入し、そのあとに「ほか」と記す
例：関学太郎、三日月花子ほか
 - ・ 翻訳者がいる場合は（訳）と付け、著者名とともに記す
例：W.R.ランバス、関学三郎（訳）
 - ・ 編集者がいる場合は（編）、監修者がいる場合は（監）と、氏名のあとに付け加える
例：関西学院大学鉄道研究会（編）

b. 書名 (タイトル)

- ・ 二重かぎかっこ『 』で囲むことが多い
- ・ 副書名 (サブタイトル) があれば、書名と副書名を「―」で結ぶ
例: 『さおだけ屋はなぜ潰れないのか?―身近な疑問からはじめる会計学』

c. 巻数

d. 出版者 (出版社、発行所)

- ・ 「株式会社」「有限会社」などは不要。
- ・ 印刷会社、製本会社ではない。
例: 岩波書店、集英社、マガジンハウス、ベースボールマガジン社

e. 出版年

- ・ 現在の本の内容になった年 (一番新しい版になった年) を採用する
 - ・ 「2 版」、「新版」など→刷版を変えて印刷すること
 - ・ 「2 刷」、「新刷」など→同じ刷版で印刷すること
刷版=本を印刷する「はんこ」のようなもの
- ・ 西暦で記入する
 - ・ 昭和年は、1900 と 25 を足すと西暦年になる
例: 昭和 50 年→1975 年
 - ・ 平成年は、1900 と 88 を足すと西暦年になる
例: 平成 7 年→1995 年

f. ページ (頁)

- ・ 「Page」の略であることを示す「P.」のあとに数字を入れる

2. 奥付の例

自由と規律	
定価はカバーに表示してあります	岩波新書(青版)17
1949年11月5日 第1刷発行◎	
1963年6月20日 第25刷改版発行	
1993年4月5日 第70刷発行	
著者	いけだ きよし 池田 潔
発行者	安江良介
発行所	株式会社 岩波書店 〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話	案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111 新書編集部 03-5210-4054
印刷・理想社	カバー・半七印刷 製本・田中製本
ISBN4-00-412141-8	Printed in Japan

3. 「読書カード」の例


関西学院中学部 読書カード

2014年度 2学期分

1年 A組 42番 氏名 三日月光

1学期分は2学期始業式に提出。
少なくともBのカードは8枚以上。
そのうち半分は「推薦図書リスト」に入っている本から。

Aのカード
2枚中2枚の意味

2枚目ならば
11, 12……となる

2014年度 2学期 2/2 関西学院中学部 読書カードA

No.	書名	著者・訳者	リスト番号	読了	カード
11	トリツカレ男	いしいしんじ	4	読了 10月 5日	
12	イワンのばか	トルストイ 金子幸彦(訳)	30	読了 10月 9日	○
13	珈琲店タレーランの事件簿3	岡崎 琢磨	×	読了 10月 11日	×
14	ギリシア神話を知ろうのついで	阿刀田 高	45	読了 10月 13日	×
15	弱くて勝つ男-開成高校野球部	高橋 秀実	×	読了 10月 19日	○
16	ランチのアッコちゃん	柚木 麻子	×	読了 10月 24日	○
17	黒魔サタンが通る!! 10	石崎 洋司 藤田 香(訳)	×	読了 10月 25日	○
18	福翁自伝	福沢 諭吉	181	読了 10月 25日	○
19	おかしな図書館- コミュニティの核を めぐる旅	猪谷 千香	207	読了 11月 8日	×
20	僕の明日を照らして	瀬尾 まいこ	233	読了 11月 14日	○

「推薦図書リスト」に入っている本にはその番号を、入っていない本には×印を。

Bのカードを書いたものに○印、書いていないものに×印。

書誌情報をきっちり
と書く。書き方は
前ページを参照の
こと

Bのカードの裏面は
書いても書かなく
てもよい。

関西学院中学部 読書カードB

氏名 _____

書名 イワンのばか リスト番号 30

著者・訳者名 トルストイ, 金子幸彦(訳) 出版者名 岩波書店 出版年 2000

読了 2014年 10月 9日 → 読了 2014年 10月 11日

感想・意見 この本の中に入っている物語のほとんどは聖書に
由来している話だ。だから「ハムレット」と思えばなんとなく
わかる。著者は「カフカースのトリニ」とある。そのなかでも好き
なところは、コスティリンとゼーリンが森へ逃げ込んだところ。友を助
けた。でもこの本では二人ともやられてしまう。思い悩んで
いるコスティリンの姿に、そこから人生の分岐点に何度も出会うだ
ろう自分の姿を重ね合わせた。あと、「人は何で生まれるか」は感
動的な話だ。ミイラの女医もまた自分の成長と重なる
ところがあるだろう。長題作の「イワンのばか」は以前にも
ある。不平不満を吐く。何事も他人の言うこと
料な気持ちで取り組めば、思いもよらない成果が得
てくる。

10行以上書ける
ようにしっかりと
読み込む。改
行はしない。

Bのカード
2学期始業式提出分：8枚以上
3学期始業式提出分：6枚以上
1学期始業式提出分：4枚以上

IV. 基本的なレポートのつくりかた



A. 目的

1. 自分をつかむため（自己表現、言語化）。
2. 他人に伝えるため（社会的に認められる形式）。
3. 人間が豊かな生活を送るために必要な、自らで問い、答え、伝える、そしてさらに問うサイクル（＝研究・学習）を体験的に得るため。

B. 体裁

1. **A4 のレポート用紙**を使用
 - ・ A サイズは国際規格、B サイズは日本独自規格
2. レポート用紙は**表面のみ**使用
 - ・ 裏面には何も書かない
3. 「**自分の手**」で作成する
 - a. プリントアウトしたもの（ワープロ、コピー、画像）、「機械の手」によるもの不可
 - b. 中学生段階では、「知の身体性」を重視
4. なるべく**ペン書き**で作成する
 - a. 容易に修正できる鉛筆書きは社会では通用しない
 - b. 慣れるまでは修正ペンや修正テープを使用しても構わない（正しくは修正印使用）
5. すべてのレポート用紙を束ね、上はしの部分 2 ヶ所をホチキスで留める

C. 内容

1. **表紙**（1 枚目、ページなし）
 - ・ テーマ、作成年月日、学年、組、番号、名前を記入
2. **目次**（2 枚目、1 ページ）
 - ・ 3.～6.の内容に沿うような目次を作成
3. **はじめに**（序論）（3 枚目、2 ページ）
 - a. テーマについて思うこと、感じること
 - b. テーマを選んだ動機や理由
 - c. テーマに答えるための学習・調査・研究の方法
 - d. その方法によって導き出されるレポートの仮説（要旨・結論）
4. **内容**（本論）（4 枚目以降、3 ページ以降）
 - a. 必ず**2 つ以上の参考資料を用いる**こと。偏りをさけるために、互いに意見が異なる参考資料がよい。
 - b. 客観的な事実と根拠ある意見だけを書く（自分の感想は「おわりに」に）
 - c. 絵や図や表などを入れても構わない。色を使っても構わない。矢印、箇条書きを活用しても構わない。他人が見たくなるような、読みたくなる、わかりやすいレポート作成を心がける。

5. おわりに (結論)

- a. レポートの仮説 (要旨・結論) (「はじめに」と比べて同じだったか、違ったか)
- b. テーマに関わる意見、考察、課題
- c. その他、感想

6. 参考資料

- a. このレポートを書くにあたって参考にした本、雑誌、話、ウェブサイトなどをすべて箇条書きにし、以下の定型を守る。第三者が追検索 (同じようにその資料を検索) できるように示す。

- 本の場合 著者名『書名』(出版社名、出版年)
例：和田萃『飛鳥—歴史と風土を歩く』(岩波書店、2003)
- 雑誌の場合 著者名『雑誌名』(出版社名、出版年)
例：リクルート『関西じゃらん』10月号(リクルート、2007)
- 話の場合 話し手の名前、話した場所、話した年月日
例：安田栄三、関西学院中学部1B教室、2017年5月1日
- ウェブサイトの場合 サイト作成者「サイト名」(URL) 確認年月日
例：明日香村「明日香村公式サイト」(<http://www.asukamura.jp/>)2017年9月1日確認

※作成者が不明なサイト、作成者のハンドルネーム(あだ名)しか分からないようなサイトを参考資料にしてはならない

※「ウィキペディア」や「はてなキーワード」は、自由参加型のサイトであるため、情報の精度・信憑性は必ずしも保証されない。よって、レポートや論文の引用元としては不適切である

- b. 先述の通り、2つ以上の参考資料を列挙すること

D. 先輩のレポート (例)